

【中国語】

読書案内

何事によらずその全体像を把握しておくことは重要で、かつ学習を効果的にします。また、中国語学習にはどのような楽しみや苦労が有るのでしょうか。先達はどのような工夫をして中国語を学んだのでしょうか。そういった点からぜひ読んで頂きたいのは、

① 相原茂『はじめての中国語』講談社現代新書 987 1990

著者は現在中国語教育界のカリスマ的存在。本書には中国語の特徴や学ぶ際のコツが書かれていますが、何より参考になるのは相原氏自身の学習体験の部分です。簡単にいってしまえば時間と金と根気と情熱をかけるといふありきたりの結論になってしまいましたが、なにはともあれご一読を。(似たものに、同じ著者の『初めての中国語「超」入門』ソフトバンク新書 038 2010 がありますが、肝心の著者の学習経験が省かれています。)

中国語の特徴については、

② 木村英樹『中国語はじめの一步』ちくま新書 066 1996 (図書館・古本屋へ)

これもユニーク。初級を終えて、読み返すとまた新しい発見があるでしょう。

みなさんは中国語が大学で教えられていることを当然のこととして受け取っているでしょうが、独仏は教養語学、中国語は実用語学と見下されていた歴史があり、それは日本と中国の関係とも密接にかかわっていました。

③ 安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波新書 新赤12 1988 (図書館・ 古本屋へ)

明治以降の中国語教育・研究の歴史を通じて、日本と中国の関わりを考えさせます。中国語と日本のどんな因縁の中に自分がいるのかを、確かめてみるのも悪くないでしょう。その他「ペケ」「ポコペン」なんて言葉も元は中国語だったこともわかります。

さて、外国語の学習は、その言語が使われる社会や文化への理解を深めることにより、より楽しいものになり、学習意欲も高まるものです。

まず、歴史(現代史)に目を向けると、

④ エドガー・スノー『中国の赤い星』上下 ちくま学芸文庫 1995 他(図書館・古本屋へ)

いまや、一党独裁・人権弾圧・覇権主義etc. と評判芳しくない中国共産党なのに、どうして熱烈に人民の支持を得て中華人民共和国成立に至れたのか。毛沢東の口述自伝で古典的文献です。中国人民解放への燃える意気込みと、今は失われてしまった(?) 共産党の精神の気高さをみることができます。「権力は腐敗する」という諺も脳裏に浮かんできます。

中国現代史を概観できるものには、

⑤ 天児慧『中国の歴史 11 巨龍の胎動 毛沢東VS 鄧小平』講談社 2004

そして、今日の中国の人々の暮らしや政治・経済・社会のしくみを知るには、

⑥ 藤野彰編著『現代中国を知るための54章』明石書店 2024

⑦ 川島真編『ようこそ中華世界へ シリーズ地域研究のすすめ3』昭和堂 2022

⑥は第7版。2024年に最新版が刊行されました。関心に応じて各トピックを読み進めることができます。⑦はタイトルの通り、台湾・香港・マカオ・華僑を含めた多様な中華世界について、政治、経済、社会、文化の諸領域で解説されています。国家としての中国（中華人民共和国）を中華世界の広がりの中で考える契機になるでしょう。。

日中関係が戦後どのような道をたどって今日の姿になっているか、また両国の社会の比較に興味をもつ人も多いことでしょう。

⑧ 国分良成・添谷芳秀・高原明夫・川島真『日中関係史』有斐閣アルマ 2013

第一線の政治学者による日中の政治関係史の入門書です。

⑨ 王雲海『「権力社会」中国と「文化社会」日本』集英社新書 0348A 2006

本学法学部・王雲海先生の御著書です。日中間の「見えない壁」について、社会生活を構成する中心的な原理、力、領域の違いという観点から論じられています。

台湾について2冊紹介しておきましょう。

⑩ 赤松美和子、若松大祐編著『台湾を知るための72章』明石書店 2022年

⑪ 胎中千鶴『あなたとともに知る台湾—近現代の歴史と社会』清水書院 2019年

⑩は台湾に関する基礎知識を提供するとともに、政治、経済、社会、文化、芸術、日台関係などについて幅広く、簡潔に解説する入門書です。⑪によれば、台湾と日本の間には戦前の植民統治、戦後70年代の日華断交など屈折した歴史があったにもかかわらず、民間社会では密接な関係が続いています。この絆を今後も維持していくために、相手を知ろうとする真摯な姿勢が必要であることを本書は示しています。